

うなもので、あの世では、閻魔の庁の通行証のようなものと考えられていた。まさか、閻魔さんが、認識票の番号によって、「お前は地獄へ行け」、「あなたは極楽の方へ、どうぞ」などと、分け隔てするとは思われないのだが、混濁の俗世の厄神が、「お前はあの世へトットと失せてしまえ！」と決めつけそうな、縁起の悪い番号の認識票があった。

内地を出る時に、第四十二号の認識票をもらって、腐っていた河端は、「縁起でもない」と、取り替えを願い出て、人事係特務曹長から、

「軍隊は御幣をかつがん。そんなら四九、八九や四二部隊の、△隊号▽を下ウするか」と怒鳴りとばされ、しよげたままそれを首にかけてやって来た。

この男は爵位をもつ裕福な家庭に育ち、一流大学の予科に在籍していたが、左翼運動に専心し、赤狩りにヒッカかって退学されて、入営して来た者だった。私と同年次の昭和九年徴集で、幹部候補生の資格のない彼は、二年兵になっても星二つの一等兵のままで据えおかれて、初年兵からは△河端さん▽と、さん付けで呼ばれていた。私をいい話し相手として五・一五や二・二六事件など右翼運動の分析批判を、マルクス流の専門語を駆使して、ひそかに語り聞かす男だった。

ところが、彼が唯物弁証法一本槍の無神論者かと思うと、そうでもなく、乳母日傘の育ちのよさがあった、おっとりとしていて、剽軽で明朗なところがある。とくに、弾丸除の干

人針を八枚も持っていて、そのうえ、成田山から金竜山、寒川神社から伊勢大神宮にいたる全国著名寺社のお守りを、東にして携帯しているのが不思議に思われた。

千人針に虱がわくと、兵隊たちはそれを熱湯に浸けてから干す。そんな時には河端に借りを申し出ると、真新らしいのをポンと抛ってくれる。この河端は、また、合い性や方位など縁起に関する話題が出ると、日頃蘊蓄の該博な知識を開けっ放しに開陳披露した。そして、四十二号の不縁起の認識票の取り替え斡旋方を、私に依頼することが再々であった。中隊の兵器係であった私は、こと兵器に関することであれば、適当に塩梅もしてやれたのだが、彼のいうことを中隊長に取り次げば、一喝くらうにきままっている、と予想していたから、

「河端氏、お迎えが来る前に手廻しよく、達磨大師に願いで、早目に受戒をされるのが、御身のためであろう、ぞ」などとからかうと、彼はムキになって、

「縁起でもない」  
とハネつける。

そこで私は、高橋木匠頭に、風呂桶の切れっぱしで白木の位牌を作らせ、これに僧籍出の山之内遊念和尚に戒名を書かせた。和尚は、△御幣院殿万端大袈裟大居士靈位▽と書き、それを秘かに河端の宝箱の上に立てておいた。位牌の裏には、享年と没年々月日の数字が空白にされていた。彼はこれで観

念したかに見え、べつに位牌を焼き捨てる気配もなく、いつまでも、そのまま飾ってあった。彼が衛兵下番で、交代後に夕食をとる時などには、盛りつけられた膳飯に箸を立てたのが、その位牌の前に供えてあったりした。これは山之内和尚の仕業である。それ以後、彼の綽名の△認識一等兵▽は△御幣院一等兵▽と改名され、御幣院殿と呼ばれるようになった。

山梨の話で笑いこけたあと、御幣院の人物評に打ち興じていると、伊東少尉が風呂から出て来た。一同は、敬礼ッ！と声を張り上げ、拳手の礼をした。伊東少尉は、

山猿の梨のつぶてを待ちながら  
笑いておれば腹のすくかも

の一首を耳打ちして通り過ぎて行った。

その時、炊事場から、飯あげノの声がかかり、山之内はガソンメン（食事容器）を打ち振って、私を取り巻いていた初年兵たちを靡き、炊事場へと向った。一団の僧兵が内裏の大膳寮を襲うがごとき勢いを見せて。

われわれの駐屯地楊木川の奥に毛甸子という部落があった。伊東少尉は、小林中隊の一部を割いて独立別動小隊となり、近々そこに分駐することになっていた。兵隊たちはこの枝隊に編入されることを嫌い、できれば中隊に残っていたいと願った。

「寄らば大樹の陰」という言葉がある。軍隊でもこの言葉の通り上級の大部隊に属しているほど、身の安全が保てて、呑気に楽ができるというのが通り相場である。

軍司令官は普通、中將か大將だが、その戦死傷率は、隷下部隊の全將兵の総数を分母とし、それ分の一と計算されるから、何万分の一の確率ということとなる。日露役の第三軍司令官乃木希典大將は、爾靈山（二〇三高地）の激戦を経たのち、凱旋にあたって、「一將功なりて万骨枯る」と、この方程式を詩にした。そのような数式において、いつでも分母におかれる一兵のいのちは、△鴻毛▽の軽きに比せられるいっぽう、△一銭五厘▽といううめっぽう安い値段で評価されていた。一銭五厘という金銭価値は、一兵を召集するに要する葉書一枚の代金で、これは鴻毛と共に吹けば飛ぶような兵隊のいのちを評して余りある形容であった。

一將と万骨との関係は、大まかには乃木將軍の云われた通りだが、これを細かく分析してみると、その者の属する部隊の上下で身の危険率に差があらわれると考えられた。それは、派遣軍一師団一旅団一聯隊一大隊一中隊一小隊一分隊の順位で、末端に下るほど増大し、その増大率は、級数的に倍大するものと考えられた。

さて、のんきで楽かどうかの計算も、いちおう、その方式によって答が割り出された。上級部隊は大木の本幹で、下級部隊はその枝葉末節である。枝先が細るに従って、コキ使わ

れ方がはげしくなり、のんきが薄れて行く。別の形容でいうと、ピラミッドの底面積を形成するものは前線の末端部隊でそれが三角錐の軍組織の重みを支えていて、その遙か頂点の雲の上に元帥府が位すると見る。この見方からすると、元帥府におられる大元帥陛下が、一番のんきで楽だということになる。

論理がそんなふうにならなると、兵隊たちはハタと行きづまりを感じ、一種不思議な焦躁にかられ、「ハテ、この論理はそれほど当てになるものではない」との疑念を持ち、襟を正して、 $\wedge$ 宸襟 $\vee$ の語に思い及ぶのだった。この宸襟という言葉は、 $\wedge$ 天子の心 $\vee$ を表わす語だが、兵隊たちは、そこで、 $\wedge$ 一千万乗 $\vee$ の貫禄と、 $\wedge$ 一錢五厘 $\vee$ の微禄とを比較し、 $\wedge$ さざれ石の巖 $\vee$ の無窮と、吹けば飛ぶような $\wedge$ 鴻毛 $\vee$ の刹那を考量する。そして、ここまで来ると、聞き慣れた俗語の「お月さまとスッポン」に考えが及び、さらに、サマーセット・モームの「月と六ペンス」(ポール・ゴーギャンの伝記の題名)に思い至るのだった。

宸襟―それは雲上の月宮殿の十二単衣の中に生まれ育まれたものである。これと下界の泥濘にうごめく熊さん八つあんなど、スッポン野郎たちの六ペンスの半纏の $\wedge$ 襟度 $\vee$ がナゼ入り合い呼応し合うのであろうか。こういうことにつき河端などは、「それは二律背反の命題で、互に争剋こそすれ、そのままでは、決して永久に融合するものではない」と

すと、さいごに墓の土饅頭の陰に伏せた時、菓盒の蓋が開いていましたから、その時、こぼれ落ちたものと思われます。いまから、その場へ行きたいと思いますが、上等兵殿、いっしょに行ってくださいませんか」

「うむ、そうか。あそこの墓場には土饅頭が何十というほどあったが、お前が伏せた土饅頭に、たしかに見覚えがあるかなあ」

「あります。盛り土にポコッと穴が開いていて、そこから覗き込むと、棺桶がグサッと朽っていて、天井を向いて大目玉を開けっぱなしの茶色い頭骸骨があらさまに見えるんです。探せばわかります」

出で立ちを整えてあらわれた彼は、私が軍靴を履き、巻脚絆を巻きにかかると、安心した様子で、手にした懐中電燈を私の足元に向けて照らしながら、意味深げにこのように語った。

「まだお盆には間がありますから、人魂や幽霊の出る季節には少し早いようではありますが、雨が来はじめましたから、燐の燃えるのが見られるかもしれません。とにかく大雨が来れば覗き穴は潰れてしまうでしょうから、骸骨との対面は今夜あたりがヤマ場でしょう」

出門の際、葉莖探しの旨を衛兵司令の松井伍長に申し出、外出の許可を願うと、松井伍長は、

「雨がパラつきはじめた。気をつけて行くがよい」

唯物弁証法をひきき合いに出して、決めつけた。しかし兵隊たちは、それに同意せず、襟度を $\wedge$ ゆとり $\vee$ とか $\wedge$ 思いやり $\vee$ の意に解釈し、帝王の宸襟の中には、熊公の襟度が当然に存在し、八公の襟度の中には、はばかりながら、天子の宸襟が潜んでいる、だから、その二物は正と反ではなく、互にそれ自身、正と合であること、恰も、声とやまびこの呼応に似たりと反論した。そして、そういう合弁法(非弁証法)とも称すべき論理の仕組みの中にこそ、人類の文明は生じ、発展し、破壊からまぬがれて伝承されるのだと結論した。そして、この $\wedge$ ゆとり $\vee$ の利益は、実は、有理数で決済が行われる可視世界の短期取り引きでは実現されることなく、不可視世界の中で、円周率が無限の循環を果てしなく繰り返えし、しかもその無理数の $\pi$ (パイ)が答として受けとめられる永遠の取り引きで決済される、と主張した。東京部隊の兵隊たちは、日々命がけの生活の中で、こんなことを考えつづけていた。

ある晩、埼玉県川越出身の飯出一等兵が私のところへやって来た。私の分隊に属する新兵の彼は、私に向かって、こんなことを言う。

「上等兵殿、まことに申し訳ないことをしてしまいました。じつは、今朝の演習で、軽機の空包莖莖を一発紛失してしまいました。ゴマかして完全返納したことは致しましたが、兵器係の上等兵殿にあとご迷惑が掛かると、申し訳ないと、一日中心配していましたが、よく思い出して見ま

と注意し、幽霊のように両手をたらしながらブラつかせ、口を横にゆがめ、むき出した空ろの目を天井に向けて見せた。

熊笹にソボ降る雨の坂道を分け登りながら、飯出は私の足元を気にして、ときに光をむけていう。

「上等兵殿、松井班長の幽霊じゃ、真に迫ってるとは言えませんよ、ね。あんな程度の幽霊なら、別に珍らしい代物じゃありませんよ。今晩は幽霊は出てくれなくても、菓莖は是非とも出してもらいたいもんです」

やがて現場に到着、いくつもの土饅頭の間を縫って、彼の思い出のところへ来ると、彼は今朝のようにそこに伏せて見、くだんの穴の中へ懐中電燈を突っ込み、私を促して穴を覗かせて、電光を揺るがして目的物を照らし出した。朽ちた棺桶の一角から、茶白色の頭骸骨が光を受けて、事もなげに沈黙している。それは無気味というよりは、むしろ垢抜けたした無機物、シナントロプス・ペキネンシス(北京原人)の親類の感じである。やがて起き上った飯出は、軍靴で濡れ草の根を分けているうちに、

「あつた、ありました。よかつた!」

と、無機物の骸骨が目をさましそうな大声をあげ、一発の菓莖を拾い上げて、私の鼻先へ突き出す。そして彼はその土壘に黙礼して、「なんだか、遠い先祖の爺さんに出会ったような気がする」といい、懐中電燈を振りまわして、丘の遠近に散在する無数の土壘を照射した。

高麗の丘に朽ちたる白骨を  
友なつかしみ吾が爺と呼ぶ

丘を下りながら、私は飯出に、武蔵の国高麗郡の話をし  
て、「たしかにあの白骨はお前の言ってるの通り、飯出たちの  
血族かも知れない。一発の薬莖の縁で爺さんに出会えてよか  
った、なあ。このぶんで降れば、それこそ、ガサツと穴はつ  
ぶれてしまふだろうよ」と言ったが、彼のたしかな返事は聞  
きとれなかった。

陸軍中佐乃木希典が、曾て五年の長きに亘って、聯隊長の  
座にあった歩一の将兵たちは、この人が詩った「一将功なり  
て万骨枯る」という方程式が、人々に見えざる閃光を与え、感  
銘を呼んでいるのを不思議に思っていた。そして、その感銘  
をもたらすものは、いったい、何者のしわざであろうか、な  
どと思いをめぐらしていた。

三日月の糸が山の端に消えた夜行軍中に、兵隊たちは自分  
たちの生き死にかかわるそんなことを考え、そのあげくに、  
「昨日またかくてありけり、今日もまたかくてありなん、こ  
の命なにを齷齪、明日をのみ思い煩う」と、藤村の詩に思い  
及ぶのだった。そして、そんな安心が眠気をさそい、ゴッソ  
と前の者の飯盒に額をブツつけて、ハッと我にかえるのだっ  
た。それは夜風が昼間の汗を消し、肌寒さが身に沁む夜だっ

將軍・乃木の詩には深い△哀歎▽がある。それは、あの胸  
に羅なる数々の勲章の栄光がもたらすものではなく、あの白  
髪の田舎親爺の後ろ姿から滲み出た染みのようなものである。  
それは、帝王と土俗、指揮官と兵、敵と味方、同胞と異  
胞など、人間差別の一切が撤去され、そこにあった世俗の安  
楽と辛苦、愛着と憎悪、歓喜と悲哀などが無差別の座につ  
き、歎は宇宙に登極、哀は地核に窮極、その時、幽明の境の  
消え失せた両極の間に、廓然とした空間がひろがり、その大  
空を一条の彗星が飛ぶ。その輝きは山川草木に生命の躍動を  
与え、人に生きとし生けるものの生命の貴さを自覚させ、突  
如として消え失せる。その光りの消え失せたあと、人の眼底  
に寂然とした万象の映像が残る。それは不可視光線によって  
照らし出された影絵のようなものである。これが乃木の詩の  
哀歎であり、乃木の人間像である。私はその世界を無坐標の  
世界と呼ぶ。

## 金州城 乃木希典

山川草木転た荒涼  
十里風塵し新戰場  
征馬前まず人は語らず  
金州城外斜陽に立つ

この詩においては、戦いの場にあつて、殺傷と勝負の坐標を

たが、私の前を黙々と歩いてきた今里一等兵が、突然、  
「アッ」と叫んだ。斜め右の天上から尾を曳いた流星が、左方  
の鴨緑江の谷へ落ちて行った。半ば歩眠状態の兵隊たちは、  
その声に、一せいに空を見上げた。そしてまた、事も無げに  
歩を運んだ。今里は私に、  
「明日あたり、すばらしい慰問袋が来るでしょう。あの流れ  
星の具合いから……」  
という。

「そうかい。今里の星占から判断すると、誰から来るのか  
なあ。彼女からかい」

「きつと、おふくろからであります」

「イヤ、それは恐れ入った。彼女からは来ないのかい」

彼は一言「ええ」と言つて口をつぐんだ。

そんな会話が途切れて、部隊は闇黒の山峡に進み入った。  
周囲に立ちはだかる山影の向うの鴨緑江の水に落ちて、ジュ  
ッという沸き音を立てそうな流星の余影が眼底に残つて、私  
は、

星流れ闇に消えけりあとおぼろ

の句を頭に浮かべた。そして、乃木希典の詩が人々に与える  
感銘は、ちょうど、流星の余影のようなものであり、仏像の  
光背の余光のようなものであるとも考えた。

まったく見事にも取り除いてしまつてゐる。この△血なまぐ  
ささ▽は、敵の血と味方の流血との総体をあらわして、その  
臭気の中に、言うべき言葉を知らない一人の人間が、荒涼の  
影絵の中に佇んでいる。

△爾靈山▽の詩の中の「一将功なりて万骨枯る」という結  
句にいたると、赫々たる武功に輝く彼の胸の勲章が、事も無  
げにハラハラと揺れ動き、零れ落ちて、凱歌に時めく甲板上  
から、玄海の底深い闇黒に消えてゆくような気がする。明治  
の詩人塩谷時敏は、かつて人間乃木を、「清光凛々として人に  
逼つて寒し」と評詠したが、乃木精神の伝統の中に居た歩一  
の将兵たちは、むしろ、△凛々たる清光▽の消え失せたあと  
に、おぼろに残る△寂々たる余香▽に酔うのであった。

兵列はやがて山峡をぬけて平地へ出た。真闇の中にうごめ  
く一団の人影が無言で兵列に道を譲った。犁を担いだ農夫と  
牛を伴つたその家族である。行くほどに、単身の農夫にも出  
合った。鋏を肩にして、平然と路端に避けて、事も無げに、  
われわれを見過すこの人たちに、銃を肩にした兵隊たちは、  
言いしれぬ畏敬の念を感じた。そして私は、われわれの飲こ  
びとこの人々の飲こび、この人たちの哀しみとわれわれの哀  
しみを考え併わせ、そも、人間の△幸▽とは、いかなるもの  
であろうか、と更に思い続けるのだった。

幾山河こえ去り行かば寂しさの

果てなん国ぞ今日も旅ゆく

若山牧水は人間のこの果てしない遍路を、そんなふうには詠じた。無言の兵列の軍靴の音が、たえ間なくコツコツとこの無明の歷程を記録するように、時を刻んでいった。

中隊長は眠む気ざましに軍歌でもやれという。先頭に立った永瀬軍曹が、

「どこまで続く泥濘ぞ、

と△討匪行△を唄い出すと、兵隊は、

「三日二夜を食もなく、雨降りしぶく鉄兜……

と唄い続けた。やがて、東の空が白みかけると、遠近の田畑の中に牛を追い、鋤を振る農人達の働く姿が見受けられた。

そうして部隊はようやく屯営にたどりついた。

少しすると、今里が顔をほころばせてやって来た。

「やはり、おふくろから小包が来ていました。この巻煎餅は、中に辻占が巻き込んであります。江戸下町の味であります」

と説明を加えて、新聞紙袋を私の前に置き、あらたまった恰好で

「伊東隊の人員は決まったんでありますか」

と訊くので、私は、

「お前、毛匁子へ行きたいのかい」

という、彼は、

「ならば、行きたくないです、ね」

と答えた。兵隊の中では、さかんに、毛匁子の噂がささやかれ、伊東隊の要員に関して、さまざまに取り沙汰がかわされていた。

「高橋木匠頭と山崎使所守は、どんなことがあろうと、設営の役柄で、伊東隊に編入されるだろう。山之内遊念和尚と神原正臣神主は、あちらが仏式なら、こちらが神式と、葬式の区分のために、いずれか一人がむこうに編入されることになるだろう」

「女房持ちの吉田なんかは、独身の伊東少尉殿について行って、この際、老兵の貫碓を生かすべきだ」

そんな取り沙汰が兵隊の話題の中心となるのは、中隊からさらに先細りの小隊へ配属されるのを、いたく気づかっていたからであった。

だいたい、一箇小隊で山中に分屯する山賊の砦などには、内地からの華々しい慰問団など、こりりんざい訪れて来る筈はなく、末細りの慰問袋が稀に配給されるのがオチである。

そして、明け暮れの出勤で、缶詰食にウンザリしているところに、月遅れの内地新聞と、時候はずれの便りが、東になって抛り込まれるのがセキの山である。兵隊たちは、どの便りにも書かれてある「くれぐれも、おん身ごたいせつ」のきまり文句に忠実な心掛けを払うことよりは、日常生活の不便と無聊から、まず解放されることを願ひ、中隊に残った

方が、のんきで便利だと思っていた。

だが、兵隊たちがあれこれ思い迷う本底には、そんな打算では割り切れない、もっと本源的な、ズッシリ重いものが潜んでいた。それは、△親爺△と呼びなれた小林老大尉と袂を分かつやるせなさとも言うべきものであった。

伊東少尉に随行して、駐屯予定地の毛匁子を偵察して帰った永瀬軍曹が、その地の状況について次のように兵隊に語った。

『宋の陸游の詩に「柳暗花明又一村」という句がある。丘を越えて行くと、パッと目の開けるところに村があらわれる。そこに清流が流れている。川の堤に柳の並木があって、雪の

ような柳絮が紛々と散っていた。その流れに柳橋という名の橋がかかっている、この橋を、川水に影を映して美人が渡る。この美人たちを、人称んで柳橋美人という。川の向うには腕を伏せたような坊主山がある。この山を人称んで国技館という……』

河端がわざとトボケた句調で、座輿を入れ、相手に出た。

「班長殿、その柳橋美人というのは左り棲なんでしょうか」

ニヤリと永瀬軍曹。

「いや、右も左もあったものではない。田舎の姑娘美人さ」

「国技館では何をやるんですか」

「もちろん相撲さね。いま、夏場所前の稽古のまっ最中だった」

「相撲は誰がとるんですか」

「ノロ桜や猪瀬川や狼谷がね。入場無料でさ」

「入場無料はよかったね」

と、みんなが笑いきけると、永瀬軍曹は、

「これからの話は、この耳で村の古老から聞いて来たことだから、信用のおける話だ」

と前置きして、次のような話をした。

「毛匁とか寛匁の匁は、古くは天子の直轄領を意味した字で、近世になって、普通の田に通ずる意味をもつようになつた。だから、その字のつく地名のところは、おそらく高麗王朝時代の天領の地であつたろう。毛は人毛、陰毛の如くに使われるが、一毛作、二毛作、上毛、下毛など農作を意味する字でもある。だが、柳の綿が飛び散る毛匁子へ行って見るとその毛の由来は、柳の毛から来ている如くに思われる。まったく、あの風景の中に居ると、陸游も蘇東坡も杜甫も李白も一列側面縦隊になって、俺の方になびいて来るような感じがする。河端なんか、お前、愛の通信に夜も寝ず苦勞しているようだが、あそこへ行くと、あまり頭を捻らずに、名文句が陸続と脳中にあらわれ、スラリスラリと手紙が書けるようになるぞ」

それまで、うなずきながら合槌を打っていた河端は、ニヤリ笑って頭を掻いた。

それから数日たって、伊東隊の人員が発表された。川端御